

京都大学 大学文書館だより

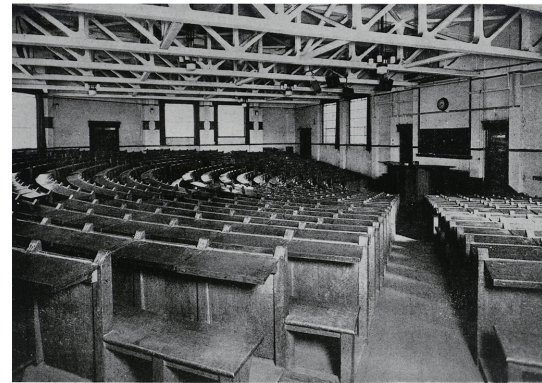
Kyoto University Archives Newsletter

第48号

目次

「羽田亨関係資料」の整理と活用について 立花 孝裕	2
HES-SO への訪問とスイスにおける 記録管理の状況について 扠 素妍	4
日誌	6

大学文書館の動き：.....	7
2024 年度京都大学図書館機構講演会 「研究データの持続可能なライフサイクル 構築へ向けて」を共催しました	
「時計台」百年 西山 伸	8



三 法学部教室ノ内部



竣工間もない頃の本部本館（時計台）

左上の写真は、竣工直後の本部本館。まだ時計に針が入っていない。右上は北側にあった法経第一教室。左下は2階の西側に設けられた教官食堂。右下は2階の大ホールで1928年11月2日に催された音楽部による御大典記念大演奏会の様子（関連記事8頁）。

「羽田亨関係資料」の整理と活用について

東京大学文書館助教 立花 孝裕

京都大学大学文書館はこの度、「羽田亨関係資料」を公開することになった。筆者は2025年3月まで同館のオフィス・アシスタントとして勤務し、「羽田亨関係資料」の整理に従事してきた。本稿では、同資料群の概要を紹介したうえで、その整理作業で感じた諸点について述べてみたい。



写真1 羽田亨肖像
(識別番号：H-00503)

「羽田亨関係資料」はその名の通り、中央アジア史研究の大家であり、戦時期に京都帝国大学の総長を務めた羽田亨（1882-1955）の文書が多くを占めるが、その長男で、中央アジア史研究者として京都大学教養部や文学部等で教鞭を執った羽田明（1910-1989）の旧蔵資料も一定数存在する。羽田家に遺された資料をご遺族からまとめてご寄贈いただいたものであり、2000点以上に及ぶ大型コレクションとなった。年代域としては1880年代から1980年代まで、内容としては公的活動から私的活動まで、多様な資料が含まれている。

本資料群は、一部は羽田亨・明自身によって整理されていたものの、大部分は様々な内容・形態の資料が混在した状態にあった。また、亨関係の資料か、明関係の資料かが確定し難いものも存在した。公開に際しては、「原稿・メモ・ノート類」「当用日記」「書簡」「書類」「羽田亨への弔辞」「刊行物」「その他」と、形態を基本として階層構造を設定した。そして「原稿・メモ・ノート類」と「書簡」については、亨関係と明関係を区別して配列し、閲覧に供することとした。

内容面でまず注目されるのは、羽田亨の残

した当用日記である。総長在任期間については既に翻刻が出版されているが¹、今回、その原本や他の時期の日記が公開されることになる。これによって、羽田亨や京都帝国大学周辺の出来事について、豊富な知見を得ることができよう。「原稿・メモ・ノート類」に含まれる手帳にも一部日記めいた記述があり、日記の内容を補完することが見込まれる。

また、在学年限短縮問題などに対する学内の意見書や、帝国大学総長会議・日本学術振興会・東亜研究所など、羽田亨が学内外の業務に関与するなかで入手した書類が多数存在する点も、本資料群の価値を高めている。戦時期の帝国大学総長の資料としては東京大学文書館所蔵「内田祥三関係資料」が有名だが、「羽田亨関係資料」には、内田が総長に就任した1943年以前の総長会議や、人文社会科学関係事業の資料が含まれている。これらの資料は、当該期の高等教育や学術研究の動向について、多角的な議論を可能にするだろう。

例えば1942年7月8～9日の総長会議では、「訓育ノ強化ニ関スル件」、「日本諸学ノ振興ニ関スル件」などが議題とされた（識別番号：羽田 457-1）。羽田が記したメモによると、文部大臣の橋田邦彦は、学生の訓育をさらに徹底するため、「教授自身ガ報国ノ途ニ則リ肇国精神ヲ具現スルコト」、「日本諸学ノ振興」を希望した。それに対して東京帝大総長の平賀譲は、「催シ事多クシテ、最モ必要ナル落付クコト少ク、〔中略〕大シテ重大ナラザルコトニ学生ヲ集メテ訓示セヨトノ次官通牒ノ如キモノ頻々タリ」と述べ、文部省の指示こそが訓育の妨げとなっていると苦言を呈した。また、文官高等試験での成績を憂慮する法学部学生の訓育が最も困難だとして、「文官試験制度ヲ考ヘルコト、又ソノ時期ヲ卒業後ニ受ケルカ何トカ適当ノ考ヲナスベキナリ」と提起した（識別番号：羽田 457-2）。これは、文部省の要求する「訓育ノ強化」を逆手にとって、

大学の教育環境をできるだけ改善しようとした発言といえる。また、訓育の方策として「肇国精神」に基づく「日本諸学ノ振興」が大学教官に求められる状況に対して、訓育が不徹底だとされる原因を文部省通牒や高等試験といった大学外部の制度に転嫁することで、教官の研究活動の自律性を最大限確保しようとしたものとしても解釈される。ここからは、研究教育機関としての帝国大学の在り方をめぐる、文部省と大学とのせめぎ合いを垣間見ることができよう。以上は簡略な紹介にとどまるが、様々な関心を持つ方々に活用いただくことで、本資料群のポテンシャルがさらに発揮されることを期待したい。

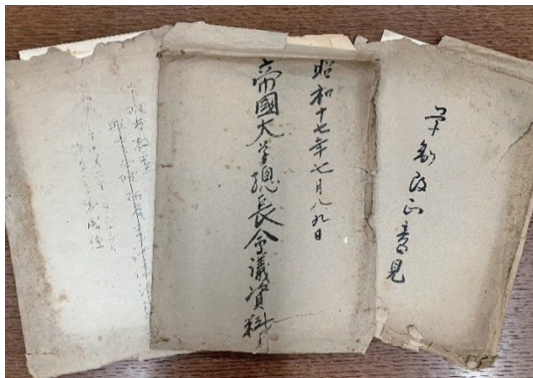


写真 2 「羽田亨関係資料」に含まれる戦時期の大学行政関係書類

かくして「羽田亨関係資料」は公開に至ったが、その整理に際して困難を覚えた点を、二つ挙げたい。一つは、点数でおよそ全体の4分の1ほどを占める原稿・メモ類の整理である。旧蔵者がある程度金具や袋などでまとめていれば良いのだが、「羽田亨関係資料」の場合、寄贈を受けた時点で1枚1枚バラバラになってしまっているものが少なからず存在した。今回の整理作業では、公開・閲覧の過程での資料の欠落がないよう、細かい単位（場合によっては1枚ごと）で1点のアイテムとして数え、原則的にその枚数を目録に明記した。ただしそれによって作業量が増大し、公開までに多くの時間を費やしてしまったことは否めない（筆者の能力の限界も一因であるが）。とりわけ羽田亨・明自身の研究についての草稿類であれば、それについての専門知識を十分に持たない整理者ができるだけ的確に内容を記述するには、慎重な検討を要した。資料の保存・管理を徹底するのはアーカ

イブズとして当然の前提ではあるが、そのなかで、収集した資料をいかにして迅速に公開するのかについても、検討を深める必要性を感じた。

次に、写真資料の整理が挙げられる。「羽田亨関係資料」には、およそ250点弱の写真が含まれ、羽田亨・明自身やその家族、友人知人らが写されている。筆者は偶然、京都帝国大学やその文学部について調査した経験があるため、そこに写された人物について、判別できる事例は相対的に多かったと自負している。ただしそれでも限界があり、誰だかわからない人物も少なくなかった。また、写真の内容を目録で説明するよう心掛けたが、写真という画像情報を、言語を通じて表現することには限界を感じざるを得なかった。実際のところ、現物の写真を見たことのない利用者が、目録上の情報から実際の資料の図をイメージするにはかなりの困難があるだろう。整理に要する時間や労力と、それによって得られた資料検索上の便宜とがどこまで合致しているかは、検討の余地があろう。

差当たり以上二点を、「羽田亨関係資料」の整理を通じて得た雑感として挙げた。こうした点は、近現代の個人資料の整理作業全般において共通する点も大きいと思われる。とりわけ原稿類の整理方法は、過去に筆者が従事した資料整理においてもしばしば困難を感じてきた点だが、大学アーカイブズの主たる収集対象の一つである、研究者の個人資料が持つ大きな特徴だといえる。各大学のアーカイブズでの情報や知見を共有しあい、課題を解決していくことが必要であろう。

縁あって筆者は今春、京都大学を離れ、他の大学アーカイブズで勤務する機会を得ることになった。これまで培ってきたノウハウを踏まえつつ、新たな職場での方法にも学びながら資料の収集・保存を進めていくことで、いっそう有効に資料の持つ価値を引き出し、学界や社会に還元していきたいと思う。

¹ 京都大学大学文書館編・発行『京都大学大学文書館資料叢書1 羽田亨日記』（2019年）。日記の全体的な概要については、同書所載の西山伸氏による解説を参照。

HES-SO への訪問とスイスにおける 記録管理の状況について

京都大学大学文書館助教 扈 素妍

今回西スイス応用科学大学（HES-SO：Haute Ecole Spécialisée de Suisse occidentale）を訪問した理由は、去年10月、当館の橋本陽助教（当時）を代表者とする「アーカイブズ評価自動化のためのAIツールの概念実証」のプロジェクトが科研費「国際共同研究加速基金（海外連携研究）」に採択されたためであった。このプロジェクトには私のほか、立命館大学衣笠総合研究機構の阿久津美紀氏、東京大学大学文書館の元ナミ氏、国際大学グローバル・コミュニケーション・センターの逢坂裕紀子氏、国文学研究資料館の堀内暢行氏も参加し、今回この6人のチーム員がHES-SOを訪問することとなった。

この国際共同研究の目的は、「アーカイブズ学の観点から、人工知能（AI）の中でも、深層学習（DL）の技術を用い、アーカイブズ評価（AA）を自動化するツールの概念実証を行うこと」である。そのため、「本分野で先端を走るスイスの研究者を海外共同研究者に加え、日本でのAIツールの実現可能性を探る」必要があった。ここでいうスイスの研究者とはHES-SOのBasma Makhoulf Shabou教授である。

今回の訪問は、プロジェクトの第一歩として、Makhoulf Shabou教授が構築したデジタル化事業のための研究所であるArchiLabとスイスにあるいくつかの機関における記録管理の状況を確認し、そこで使用されつつあるAIツールについて説明をうけること、また、互いにこれからの研究について意見交換することが目的であった。

訪問初日の3月3日には、午前中はArchiLabの研究員であるCécile Aguzzi氏やMakhoulf Shabou教授が、本プロジェクトのチーム員を歓迎する場を設けて、ArchiLabの構成員や当該大学の国際交流関係者などとあいさつを交わした。午後は当該大学のアーキビスト養成カリキュラムに含まれている授業に招待され、プロジェクトチーム員一人ずつ約15分間の発表を行った。発表の内容は、主に日本の公文書管理の現状についてのもので、まず、チームリーダーの橋本助教から、チーム

員の簡略な紹介とチーム構築の経緯、またこのプロジェクトの目標や日本の評価選別の問題点などについて説明があった。

つぎに、阿久津氏が国立公文書館の評価選別過程の法的基盤やその流れについて概要を発表した後、逢坂氏が、日本政府における記録管理業務のデジタル化について、その経緯から、政策要件、現在の電子記録に対する評価選別業務と将来のあり方まで報告を行った。

続いて、日本の各地方自治体における評価選別の事例について、元氏は、三重県の現状について詳しく説明し、また、堀内氏は鳥取県における評価選別の自動化に関する事例を紹介した。最後に私は京都大学の法人文書のライフサイクルと大学文書館における非現用法人文書の評価選別について、廃棄と保存の規定などを通じて簡略に伝えた（写真1）。



写真1 HES-SOの授業での発表

2日目には、スイスにある国際機関の記録管理や評価選別の現状を確認するため、Makhoulf Shabou教授の案内を通じて、世界貿易機関（WTO）アーカイブズと国連ジュネーブ事務局アーカイブズを訪問した。WTOの場合、機関所属の5人のアーキビストとインターン職員により、作成時からの記録のデジタル化や既存書類の整理が進められており、最近はメールも以前のように全部印刷して保管するのではなく、記録管理システム上での保管が可能な状況になったと説明された。さらに、整理されている資料の中で、日本と関係のあるいくつかの書類・書簡や写真を用意し解説していただいた。特に印象深かったのが、1994年4月にウルグアイラウ

ンドがようやく合意に至ったことに対し、当時日本の大使（Envoy of the Government of Japan）として松永信雄が送った書簡であった。これは、協定書類だけでは読み取れない当時の国際情勢の臨場感を感じ取れる資料であり、実際、そのような種類のものをアーカイブズへの移管対象としているとのことであった。以上から、多様な文書を管理することの重要性を再確認できる場であった。

国連の方では、アーキビストから評価選別過程と近年の資料公開について話を聞くことができた（写真2）。ここで特記すべきことは、UNの評価選別はジュネーブの意向のみでは実行できず、そちらから評価選別のスケジュールを作成し、ニューヨークの本部へ送り、許可を得てから評価選別を進めることができるということであった。また、日本の一般的な状況とは異なり、UNでは記録をファイルごとではなく、シリーズ別に管理していることを確認した。



写真2 記録管理について説明する国連のアーキビスト

3日目は、Makhlouf Shabou 教授の研究に協力し、AIを用いた評価選別の自動化ツールの導入に関わったGrégoire Oguey氏を訪問し、ヌーシャテル市アーカイブズ（AVN：Archives de la Ville de Neuchâtel）を見学した。AVNではアーキビストであるOguey氏がAVNの概要を説明した後、当該機関が所蔵している14世紀から15世紀のヌーシャテルにおける公文書管理方法がうかがえる資料を拝見した（写真3）。これは現代のメタデータに該当するような、当時の発信・受領書類についての情報を記入した帳簿である。その帳簿上で書類ごとに番号を付し、その番号をたどることで、この書類がいつどこからきたものであるのか、応答した文書は何であるかなどの情報を確認できるシステムが発達していたと解説していただいた。記録の作成から保存までの過程においてデジタル化が進んでいる中、文書管理の根源的な姿を示されることで、文書管理の重要性・有効性を再度確

認できる機会であった。

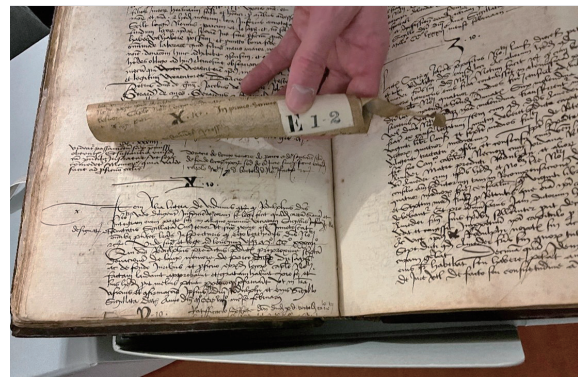


写真3 文書の番号から文書関連情報を確認できる帳簿

残りの日程で、ArchiLabにおいて、ワーキングセッションを開き、ArchiLabと私たちプロジェクトチームのこれまでの研究や、これからの研究について情報交換と相談を行った（写真4）。そこでArchiLabが現在開始した2つの主なプロジェクトについて説明を受けた。1つはAsk to Archivistというチャットプログラムの開発であり、もう1つはエコロジーの観点をデジタル記録の運用管理の評価に加えるというもので、電力消費による環境負荷と持続可能性（sustainability）を考慮したシステムの構築に関するプロジェクトであった。これらは私たちのチームも想定していなかったものであり、大いに刺激を受けた。また、今後AIツール運用の前段階において有効となる評価選別成熟度評価モデルについて、ArchiLabからの助力を受けながら、日本側のデータセットの提供などで協力するという結論にいたった。

今回の訪問を通じて、スイスの環境で開発・利用されつつあるAIツールを、直ちに日本の公文書保存機関などに適用することは難しいと認識した。しかし、今後の協力の中で互いの環境差を埋め、評価選別におけるAIツールに何が必要となるかについて考察を深められるものと考えている。



写真4 ArchiLabでのワーキングセッションの風景

[日誌] (2024年10月～2025年3月)

2024 年

- 10/ 2 西山教授、新採用職員研修において「京都大学の歴史」「なぜ文書を作る？ ー公文書管理法と私たちー」と題して講義。
- 10/23 学外より、鈴木正教授の写真の使用に関する照会。
- 10/24 大学文書館教員会議。
- 10/28 京都大学生協同組合より、花谷会館関係の「故理学博士花谷暉一氏」写真額と「花谷会館由来」額の寄贈に関する照会。
- 10/30 西山、京都大学基金「感謝の集い」（於百周年時計台記念館）において「京都大学の歴史」と題して講演。
- 10/31 『京都大学大学文書館だより』第 47 号刊行。
- 11/ 2 橋本助教、デジタルアーカイブ学会第9回研究大会（於東京大学）において、「アーカイブズの記述標準 RiC 準拠の検索システム：試行結果とその検証」と題して研究報告。
- 11/ 5 橋本、企業史料協議会主催第13回ビジネスアーカイブズの日シンポジウム（於連合会館）において、「AI・デジタル時代のビジネスアーキビストのこれまでとこれから」と題して講演。
- 11/ 7 京都大学医学部皮膚科学教室より、京都大学医学部附属医院資料寄贈。
- 11/11 学外より、第三高等学校在学中の曾祖父のものと思われるノートの寄贈に関する照会。
- 11/14 橋本、国文学研究資料館主催アーカイブズ・カレッジ短期コース（於長野県立歴史館）において、「アーカイブズと情報コントロール」と題して講義。
- 11/15 谷内正順関係資料を公開。
- 11/27 奈良県域ニュース番組『ならナビ』より、奈良への修学旅行に関する放送企画のため、1888 年の第三高等学校修学旅行について照会。（12 月 23 日（月）「はてなにくえすと」で放映）
- 11/21 大学文書館教員会議。
- 11/28 相馬洋子氏より、池田保生関係資料寄贈。
- 11/29 北國新聞より、谷内正順関係資料につき取材。
- 11/29 京都新聞より、京都新聞社所蔵の戦時期資料の価値につき取材。
- 12/ 4 松田陽一氏より、11 月祭パンフレット5冊及び 11 月祭実行委員会関係資料寄贈。
- 12/ 9 学外より、尹基福の第三高等学校に関する資料の有無について照会。
- 12/12 大学文書館運営協議会。

2025 年

- 1/ 9 大学文書館教員会議。
- 1/14 学外より、工学部学籍簿（明治～昭和初期）の所蔵についての照会。
- 1/16 2024 年度京都大学図書館機構講演会「研究データの持続可能なライフサイクル構築へ向けて」（於京都大学芝蘭会館山内ホール）を共催。橋本、同講演会オプショナルセミナー（於京都大学附属図書館）において、「長期保存の概念的枠組みである OAIS 参照モデルの概要」と題して講演。
- 1/31 事務補佐員星野香織退職。
- 2/ 3 総務部総務課とともに北部構内事務部管理課・農学研究科・フィールド科学教育研究センターを対象に法人文書監査実施。
- 2/ 4 企画展「職員たちの京都帝国大学ー舞台裏の主役ー」開催（～4 月 13 日）。
- 2/10 学内より、初代附属医院長「猪子止戈之助」の写真利用について照会。
- 2/19 学内より、農学部資料館所蔵の図面などについて寄贈の申出。
- 2/19 大学文書館教員会議。
- 2/19 橋本、I Trust AI 第 13 回総会（オンライン）において、「Use of AI Tools in Local Governments and its Implications on Public Records Management」と題して研究報告。
- 3/ 3 橋本、属助教、Basma Makhoul Shabou 教授の講義（於西スイス応用科学大学）において、日本の評価選別について講演。
- 3/12 京都新聞より、卒業式における仮装につき取材。
- 3/13 大学文書館運営協議会。
- 3/13 西山・属、農学部資料館収蔵の演習林関係資料を調査。
- 3/14 学内より、三高寮歌の「紅もゆる」の「もゆる」が漢字かひらがなについて照会。
- 3/18 大学文書館教員会議。
- 3/21 『京都大学大学文書館研究紀要』第 22 号刊行。
- 3/26 学外より、藤縄謙三の著作物の著作権者について照会。
- 3/28 医学図書館誌より、企画展につき取材。
- 3/31 オフィスアシスタント鷲澤遼祐退職。
- 3/31 オフィスアシスタント立花孝裕退職。
- 3/31 再雇用職員小林英治退職。

大学文書館の動き

2024 年度京都大学図書館機構講演会 「研究データの持続可能なライフサイクル構築へ向けて」を 共催しました

1月16日、芝蘭会館山内ホールで国際シンポジウム「研究データの持続可能なライフサイクル構築へ向けて」を京都大学図書館機構と共催しました。

本会では、研究データの長期保存という分野において先進的な取り組みを進めるカナダの専門家を招き、その実現のための基盤となるライフサイクルをどう構築していくかについて議論しました。1人目の報告者であるスティーヴン・マークス（Stephen Marks）氏は、トロント大学図書館のデジタル保存の司書であり、カナダにおける研究データ管理の発展の歴史について概説されました。2人目のジュリー・シー（Julie Shi）氏もまたデジタル保存の司書であり、オンタリオ州大学図書館協議会が提供する研究者ポータル（Scholars Portal）に所属されています。研究者ポータルは同州の各大学図書館共通の技術インフラとコレクションを提供する組織であり、そのサービスの1つであるボレアリス（Borealis）に含まれる研究データのデジタル保存の機能についてシー氏から報告されました。一方、日本側からは、国立情報学研究所の込山悠介氏が、研究データ管理システムである Gakunin RDM について、そして同研究所の南山泰之氏が、長期保存機能をもつオープンソースソフトウェアの比較検証について報告されました。名古屋大学情報連携推進本部の青木学聡氏と京都大学情報環境機構の西岡千文氏によるコメントを経て、活発な質疑応答が行われました。

なお、本会の配布資料および動画は、図書館機構のウェブページ（<https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/bulletin/1402322>）からアクセス可能です。参加できなかった方々もどうぞこちらからご覧ください。



第1 報告者のスティーヴン・マークス氏

「時計台」百年

京都大学大学文書館教授 西山 伸

現在「京都大学百周年時計台記念館」と呼ばれている建物（以前は本部本館と称されていた。以下通称の「時計台」と表記する）は、1925年の竣工なので、今年で百年ということになる。

時計台は鉄筋コンクリート2階建て、中央に高さ31メートルの時計塔を擁している。竣工当時はこの近辺で飛び抜けて高い建物だったであろう。新聞には「洛北の一偉観」と報じられている（『京都日出新聞』1925年3月4日付朝刊）。設計したのは工学部建築学科の教授だった武田五一、日本におけるゼツェッションの集大成作品と評されている（京都大学広報委員会『京都大学建築八十年のあゆみ』）。

内部は今と異なり、2階には2000人の収容が可能な大ホールが設けられたほか、総長室・貴賓室・教官食堂などが置かれた。1階には事務室、法学部・経済学部の教室があり、北側につくられた半円形の法経第一教室は学内で最も大きな教室（500人収容）で、授業だけでなくさまざまな講演会や学生大会などにも使われた。ちなみに、法経第一教室は日本で最初に拡声器が置かれた教室といわれており、これで学生は授業前早めに来て席の争奪戦をしなくてすむようになったと報じられている。またその記事には「序（ついで）に下宿まで放送してくれ、ば、床の中で聴講が出来るのだが……しかし今にそんな時代がきつと来ます。五十年以内には」と書かれている（『京都帝国大学新聞』1929年4月15日付）。コロナ禍におけるオンライン授業を体験した身としては、何とも言えない気分である。

時計台の建設が決定されたのは1920年9月9日の評議会においてであった。学生数が増加している法学部の教室を新たに設けることがすでに決められていたが、これに隣接す

る形で「中央大講堂」を建設することになったのである（『評議会議事録 自大正二年至大正十五年』識別番号：MP00002）。もともとその場所には理工科大学本館があったが、1912年に焼失して以来空き地となっていた。

ところでこの時計台、完成以前から部分的に少しずつ使われ始めていたようである。1922年12月14日には来日中の高名な物理学者アインシュタインが京大を訪れているが、その歓迎会は「法学部中央講堂（新築）」で催されるので参列するよう学生に告示が出されている（『学報』第792号）。歓迎会には「学生の集まるもの約千名」と報じられており（『京都日出新聞』1922年12月15日付夕刊）、当時こんな大人数を収容できたのは時計台2階の大ホール以外になかった。また翌1923年11月には2階の西側に設けられた教官食堂が完成し、営業を開始した（『学報』第906号）。このように、時計台は出来上がったところから順次使われ始め、最後に時計塔が建てられて完成に至ったのである。もっとも塔の時計はすぐには稼働しなかったようで、竣工から4カ月以上経った1925年7月22日付で経済学部の河上肇が弟子の櫛田民蔵に送った書翰には、運動部の試合で京大を訪れた他大学学生の歓迎会が「京大の例の大講堂で一針のない時計台の下にある大々講堂」で催されたと記されている（大内兵衛・大島清編『河上肇より櫛田民蔵への手紙』）。

ともあれ、完成した時計台は手前に植えられていた楠とともに京大のシンボルとなり、その後滝川事件（1933年）、大学紛争（1969年）など歴史上重要な事件の舞台となったことはよく知られている。竣工から百年を迎えた時計台は、今後どのような役割を果たしていくのであろうか。